

〈翻訳〉

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉(15)

追記及びデントン関連参考資料

坂 本 清 音

阪 上 敦 子 監訳

吉 岡 弘 子

矢 吹 世紀代

小 島 紀 子

柿 本 真 代

書簡翻訳：前号からの続き

〈バートン書簡 B-32〉【吉岡弘子 訳】

1918年6月10日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様¹

東部と西部両方でのあなたの募金活動の輝かしい成功を、あちこちで耳にしています。デントンさんには一言お祝いの言葉を申し上げたく存じます。同志社のために米国横断の目まぐるしい旅で成し遂げられたことについて、

お聞かせいただければ大変嬉しいとお伝えしたいです。これらの寄付金は、確かに同志社にとって非常に都合がよい時期に集まることになり、原田社長²、理事会の方々にも大きな喜びとなることでしょう。

さらに日本に帰られて、同志社の状況³がどのようなものかも伺いたく存じます。私どもが話し合った〔同志社の〕難局については、原田社長や他の方々とも何度も書簡でやり取りをしたのですが、終息に向かいましたでしょうか。その結果、これ以上の内部の激震や紛争もなく、同志社が前進していくという見通しは立っているのでしょうか。

代表団の方々⁴は、こちら〔ボストン本部〕に立ち寄られてから日本に向けて出発されました。デントンさんはきっと〔日本で〕一行を何度か見かけられたことでしょう。今は〔日本を発って〕アメリカの沿岸近くを航行中だと思います。私どもは一行から話を聞けることを大変心待ちにしています。日本での代表団の仕事についてはほとんど聞いておりません。あまりにも忙しく、どのようなことをしておられるのか、手紙を書く機会さえあまりなかったのではないのでしょうか。

デントンさんとそのお仕事、そして原田社長や支援者の皆様がたのご多幸をお祈り申し上げます。

敬具

ジェームズ L. パートン⁵

1. デントンはこの書簡の直前、4月に2度目の休暇から日本に帰国していた。1917年1月27日に横浜港を出港（1月22日に一度出港したが船は天然痘のため引き返した）、約1年3か月間米国に滞在した。日本への帰国は翌1918年4月1日サンフランシスコを出港、4月8日ホノルル着、そして横浜には4月20日に着いた。京都へは4月23日に帰着。同志社女学校の生徒、教師が京都駅までデントンを迎えに行った（『同志社女学校期報』42号、p.9）。
2. 原田助（1863-1940）熊本藩士、鎌田収の次男。1880年、同志社英学校に入学、後に神学科に転じる。卒業の翌年、1885年に按手札を受けて神戸教会牧師に就任。1888年渡米、シカゴ神学校、イエール大学に留学。帰国後、番町、平安、神戸の各

教会の牧師を歴任。1907-1919年、同志社第7代社長（のち総長と改称）。同志社の大学昇格と発展に寄与した。1919年、総長を辞職。1920-32年、ハワイ大学東洋学部の教授に就任。なお、原田は1918年10月、総長に就任したので、この書簡の書かれた6月10日頃は「社長」である。

3. 1917-18年（大正6-7年）の学内の騒動は同志社紛擾（ふんじょう）と呼ばれる。1918年10月原田は総長に選出されるが、この学内の事態を抑えきれず3か月後、1919年1月辞任することになる。原田総長辞任へと繋がる原因・理由については原田派、反原田派が相互に対立、相手を非難、中傷したことにあるが、校友会、中学・普通学校、そして大学のグループがそれぞれの理論を展開し主張をまげなかったことにある。

まず、中学・普通学校では、原田の長期におよぶ海外出張や朝鮮伝道で学校執務に空白をもたらしたことへの不満は大きかった。次に校友会は原田が推した大学開校を積極的に支援したが、その一方で大学内で学生の名によって出されていた決議、すなわち大学の設備や内容への不満の表明に対して、校友会では統制力を失っている原田の姿勢に危惧を抱き、多くの理事や委員が辞任した。

この書簡の1918年6月頃はこの騒動の渦中であり、アメリカン・ボード本部事務局の心配事にもなっていたと思われる。（『同志社百年史』通史編（一）、同志社、1979年、pp.780-787参照）

4. この年派遣の代表団は計3名で、医療宣教師の Dr. John C. Berry (1847-1936)、カリフォルニア州ポモナ・カレッジ第4代学長の James A. Blaisdell (1867-1957)、そして事務担当役のアメリカン・ボード本部事務局の副幹事 Enoch F. Bell である。このうちの Berry と Blaisdell は妻を同伴。両夫妻は1918年2月25日横浜着。先に出発した Bell とは横浜で合流した。この代表団の目的は、アメリカン・ボード日本宣教50年を翌年に控え、現況の視察、及びこれからの伝道方針を話し合うため、日本ミッションの招聘を受けて派遣された。
5. Barton, James Levi (1855-1936) 米国バーモント州シャーロットでクエーカー教徒の家に生まれる。1881年ミドルベリー・カレッジ卒業後、ハートフォード神学校へ進学。1885年、海外伝道に関心を持ち宣教師として妻とトルコへ向かうが、7年後、妻の病のため帰国。1894年、N. G. Clark の引退を受けてアメリカン・ボード本部事務局の海外担当幹事に就任。

〈ベル書簡 BE-12〉【矢吹世紀代 訳】

1918年7月10日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

昨日の運営委員会で、デントンさんのご友人の一人が、あなたの速記の仕事を手伝わせようと娘を京都に送りたがっていることを知りました。マクリントックさん¹がデントンさんを手伝っているということに気が付きましたが、ウールヴァートンさん²を使えないということが理解できませんでした。つまり、あなたから何のお話しもなかったので、その問題は完全に片付いたものと考えていました。ウールヴァートンさんの助けが得られたら勿論私もうれしく思います。デントンさんとそこで共に過ごすことで、ウールヴァートンさんには大きな意味ある1年になることでしょう。

ご親切にもお貸しいただいていた『前線での十字架』³を別便でお返しいたします。私が読んだそのテーマの本の中でも最高の1冊のうちに入ります。他の方々も読まれてすばらしいと断言されていますが、特にブレイズデル夫人⁴が絶賛されていました。

デントンさんにはこの夏はしっかりと休みを取っていただければ、と思っています。日本に戻られたときは思っていた以上に疲れていたにちがいありません。あなたの仕事ぶりを拝見して、必要な休みを取るのがデントンさんにはどれほど難しいことかは分かりますが、休暇はぜひともきちんと取るように留意されることを心からお願いします。

デントンさんとご一緒した頃やミッションでのことが、月日を追うごとに甘く幸せな思い出⁵となっています。本当に楽しい時間でした。そこでの経験を通して多くのことを学びました。この先、見識のある立派な人間になりたいものです。本当に皆さんを愛してますし、その愛情が仕事の上でのよい土台となっているのでなければ、何が私の基盤なのかわかりません。

先日ポーリーン⁶から電報が届いたので、ニューロンドンのシスタレ家⁷に彼女の帰郷をすぐに伝えました。中尉⁸がこちら「米国」か、それとも海の向こう「戦地」かはまだ聞いていませんが、ポーリーンがシスタレさんのことを口にしたのなら、「我らの兵隊さん」の弟のことを言ってるのだと思い

ました。その弟さんには連絡を取っています。

私の乗った汽車が5時間遅れたので、シカゴにいるマクリントックさんのお父上⁹を訪ねることができなかった旨、彼女にお伝えください。[アメリカン・ボードとウーマンズ・ボードの] 2ヶ所の事務所で仕事に追われていました。シカゴで唯一過ごした晩は、中部ウーマンズ・ボードのリー夫人¹⁰と私ども代表団が折に触れてきた様々な問題について話し合わねばなりませんでした。ですが、マクリントック教授には電話をかけ、私から伝えておいて欲しいと娘さんが思われる事柄については、すべてお話しできました。

さて、仕事の話に移らねばなりません。パートン博士¹¹はこのところ忙しく、あまりここにいられません。ですが、残された私たちメンバーで、わずかな範囲内ですが、業務を進めています。来年早々オルデン・クラーク¹²が事務室に来ることがすでに決まっています。この人事異動で、海外部門の専任職員として働いてもらうことになるかと期待しています。

牧野氏¹³はここ[ボストン]では好感を持たれています。船上で私たちの仕事はよくはかどりました¹⁴。この仕事とは、日本人への霊的な働きやその他でのことという意味ですが。日本で耳にした牧野氏への批判については、もちろんここでは何も申し上げません。言わぬが花でしょう。

敬具

イーノック F. ベル¹⁵

1. McClintock, Hilda (1893-1953) イリノイ州シカゴ出身。1913年シカゴ大学卒業。1918年4月20日デントンと一緒に横浜到着。4月から9月まで同志社女学校で教える。9月3日ミッションを引退してシベリアで赤十字の仕事に従事。(シベリアでテキサス出身の陸軍大尉 James David Brown と知り合い、1921年2月9日イリノイ州で結婚)
2. Woolverton, Carol (1893-1961) ニューヨークシティ出身。ウィートン・カレッジを1913年卒業。1918年8月来日。1918-19年同志社女子専門学部及び普通学部講師。宣教師としてではなく自費で1年間ボランティアとして来日。デントンが2回目の休暇の折に探した。

3. 原作は *The Cross at the Front; Fragments from the Trenches* (New York, Revell, 1917)。作者は従軍牧師 Thomas Tiplady (1882-1967)。銃弾の音が聞こえる生々しい戦場のテントの中で執筆された。第一次大戦の西部戦線で1916年7月1日、敵の陣地を攻撃したイギリスのロンドン国防義勇軍第56師団の勇敢な兵士の勇気に感謝と賞賛の意を表し捧げられた。
4. 夫人は Florence Carrier Blaisdell。夫は代表団の一員のボモナ・カレッジ学長 Dr. James A. Blaisdell。
5. ベルの日本滞在期間は1902-1905年。そのうちの京都は1904年9月-1905年3月の約半年間である。
6. Rowland Sistare Lane, Pauline (1892-1966) 京都生まれ。アメリカン・ボード宣教師 George Miller Rowland の娘。ミドルベリー・カレッジ卒業後、1917年英語教師として来日。婚約者 William M. Sistare が第一次大戦から帰還した1918年7月に結婚するが、4か月後、夫はスペイン風邪で病没。[その後については〈BE-13〉註6で後述]。
7. シスタレ家は Pauline の婚約者 William M. Sistare の実家。ニューロンドン はコネチカット州北東海岸の港湾都市でテムズ川河口に位置する。
8. 中尉とは婚約者 William M. Sistare のこと。
9. 父はシカゴ大学教授 William Darnall McClintock (1858-1936)。専門は英文学。
10. Mrs. Lucius Orren Lee 1923年の時点ではシカゴの中部ウーマンズ・ボード海外部門幹事 (Foreign Secretary)。ベルはシカゴでアメリカン・ボードとウーマンズ・ボード両方の事務室に立ち寄るが、この2か所の所在地は同じである (19 South La Salle Street, Chicago, Ill.)。
11. バートン 前出〈B-32〉註5参照。
12. Clark, Alden Hyde (1878-1960) アーモスト大学卒、1904年、妻とアメリカン・ボードの宣教師としてインドへ渡り14年間滞在。その後、1919-1923年まで帰国。この書簡で Bell は Clark を来年 (1919年) 本部事務局に移動させると書く。実際1922年のアメリカン・ボードの機関誌 *Missionary Herald* にも本部の幹事候補 (Candidate Secretary) として Clark の名前がある。だが1923-29年には再度インドへ渡り、ボストンの本部では最終的に1929年から退職する1947年まで働いた。父は著名な経済学者 John Bates Clark。
13. 牧野虎次 (1871-1964) 滋賀県出身。同志社神学校卒業後、様々な職を歴任。熊本・東亜学館で教師、同志社予備校で寮長、北海道では教誨師、そして土佐教会や京都教会で牧師も務めた。1899-1902年にはイエール大学に留学し、社会学を学ぶ。次便 ([D-58] 1919年5月26日付) の牧野と日野が学校を計画していた頃は1916年から組合教会本部の総幹事をしていて、1938年、第11代同志社大学総長。新島襄の直

弟子で総長になった最後の人物。社会事業に対する関心は強く、内務省社会局嘱託、満鉄社会課長、家庭学校校長なども歴任。晩年はシカゴやホノルルでも牧師を務める。

14. 牧野虎次とベルなどの代表団の一行は同じ船（諏訪丸）に乗船していた。牧野は5月25日神戸から、そして代表団は5月30日横浜から乗船。6月12日シアトルに到着した。

15. Bell, Enoch F. (1874-1945) アメリカン・ボード宣教師。1902年11月来日。札幌、神戸を経て京都には1904年から1905年にかけての半年間だが、デントンと親交を結んだ。夫人の体調不良により1905年3月帰国。翌年からボストン本部の海外部門副幹事として活躍。

〈デントン書簡 D-58〉【小島紀子 訳】

[1919年] 5月26日

大阪 月曜日

ベルさん¹、ここで今京都行きの列車を待っているのですが、ウォーターハウスさん²へのあなたのことづくに答えるため、そして他にも色々な理由で率直に書いています。[所定のアメリカン・ボードの用紙でない] 他の紙を使っていることや雑な文章をお許してください。このプラットフォームにいる誰もが私がしていることにとても興味を示しています³。

ケリーさん⁴の敷地の南西角の狭い土地売却の件が、再びミッション会議の議題にあがると思っていましたし、それに否決の投票ができると思っていたのですが、臨時委員会⁵を通過してしまったと聞きました。さて、ベルさん、その土地売却を運営委員会⁶に依頼する前にじっくり考えてください。

南向きは日本では最も重要な方角です。北側に10フィート [約3メートル] の大きな壁を建てることで、そこにある小さな日本家屋を見えないようにすることはできますが、南側は1インチの土地も決してあきらめるべきではありません。その土地は宅地にするにはすでに高すぎますし、ボードが京都の私たちに下さったすべての土地と家に支払った以上の額でいずれ売却できる

でしょうが、前方の土地は隅から隅までどんなに狭くても、全体の価値を上げることでしょう。すると知事公舎⁷はケリーさんの敷地の南側に沿って建てられるでしょうし、その結果、裏庭のせいで様々な不都合を経験することになるでしょう。どうか敷地を全面裏庭向きにしないでください。

ステーションの会議で、この件についてはすべてかそれ以上のことも言いましたが、誰も耳を傾けてくれませんでした。誰かを批判するのではありませんが、一般的に、宣教師の中にはビジネス感覚がほとんどない人もいますと感じます。この人たちは知的に、かつ精神的に非常に発達しているので、将来のお金の損得勘定について考えることができないのです。こんなことを書いてお許しください。

ベルさんのお手紙をあとでスピア博士⁸に渡して、あなたがお手紙の中で書き残しておられることをあなたに〔原文のママ〕お伝えします。それは素晴らしい手紙です。どうか原田博士には優しくしてあげてください。博士はこの問題ではずっと立派に対応しておられます。日野氏⁹は京都に住んで、両仏教大学（東と西本願寺はそれぞれ大学を持っています）で週に1回、帝国大学で1回講義をし、また週に3回、神戸第一商業学校で英語と算数を教えています。お元気そうです。火事のあと、多額のお金が受け取れたのは素晴らしいことでした。日本人は素晴らしいです。

牧野氏¹⁰は内務省社会福祉局の役人の職を引き受けました。彼が牧師の職をやめざるを得なくなりがっかりしています。もし牧野氏と日野氏が〔計画した〕学校について率直に腹藏なく話してさえいれば、すべてがうまくいったのでしょうが、二人はそれを重大な秘密にしていました。広岡夫人の娘さん¹¹はその計画をまったく知りませんでした。広岡夫人の銀行の頭取も二人から一言も打ち明けられていなかったらしいです。牧野氏と日野氏がこの人たち全員に誠実だったなら、広岡夫人の死後、お金は二人がすぐに使えるようになっていたでしょうに。ですが娘さんには相談がなかったので、日野氏と牧野氏が彼女の母上〔広岡夫人〕にあまりにも影響を与えすぎたと思い、

両者に対して個人的に非常に敵意を抱き、学校¹²の設立計画にはまったく賛同してくれませんでした。牧野氏がアメリカで購入した書物はすべて私の家にあり、学校創設は諦めています。牧野氏の個人的な欠点については、どの噂話もまったく信じていません。そんな噂はすべて嘘にちがいありません。そんな嘘を信じないでください。

日野氏はどんなに力量があり美德があっても、自分より劣った人とししか仕事できません。ベルさんはその嫉妬心は女性の欠点だと思ったことはないですか。まあ、それは男性にもありますし、日野氏はその嫉妬心がひどいのです。あまりにも悲しいことです。中でも、組合教会が最大の被害者です。

芦田氏¹³は神学校で順調にやっておられますが、彼はメソジスト教徒でしたので、組合教会の人たちからは決してそのことを見過ごされることはありません。この人たちは内部で組合員同士でけんかをすることはありますが、部外者を受け入れることはできません。組合教会で育ち、同志社で教育を受けた誰かが、近い将来、学部長になってほしいと願っています。

アメリカにいる同志社出身者すべてを見守り、援助の手を差し伸べてください。富森¹⁴はイエール大学にいます。彼が[学部長の]力量を十分に持つようになるとは思いますが、そうなるかもしれません。とにかく、同志社出身者全員にあらゆる支援を与えてやってください。この者たちに、本物の会衆派教会主義を歴史的にアメリカン・ボードの観点から見せてやってください。そして偉大な牧師たちが、その同志社出身者を自宅に招いて、会衆派教会主義がどんなに素晴らしいものかを実感させるのを手伝ってやってください。ベルさんにはアメリカにいる同志社出身の男性や女性全員の綿密なリストをお送りするつもりです。その人たちが私たちの教会や教会員について、内側からの知識を多少とも得られるように取り計らってください、と願っています。

どうかバートン博士¹⁵によろしくとお伝えください。これがベルさんのお手元に届く頃にはきっと彼はトルコとアルメニアの長になっていることでしょ

う。

この手紙を車内で書き終わりました。

親愛なるあなたのベス¹⁶に愛を込めて。この手紙はボードの正式な用紙に書いていませんのでご自宅に送ります！

M. F. デントン

1. ベル 前出 (BE-12) 註15参照。
2. Waterhouse, Madeline Clara (1888-1983) アイオワ州出身。オペリン・カレッジに2年在学。1915年、ハートフォード宗教教育学校 (Hartford School of Religious Pedagogy) 卒業。同年来日。京都には1917-20年3月までいた。1920年3月末、デントン・ハウスでフレンド派宣教師 Herbert V. Nicholson と結婚。その後、水戸へ移る。このウオーターハウスと前述 [BE-12] のウールヴァートンはデントンが2回目の休暇時に見つけて同志社でボランティアとして教えた。京都ではデントン・ハウスに住んでいた。
3. デントンは大阪駅の京都行のプラットフォームで汽車を待つ間にこの書簡を衆人環視の中で書き始めている。少なくとも1919年 (大正8年) に駅や車内で外国人がずっと英語の手紙を書いている光景はさぞ珍しかったことだろう。文末には「車内で書き終えた」とある。マイクロフィルムには COPY との記載がありタイプライター打ちである。
4. Cary, Otis (1851-1932) 息子フランク、同名の孫と三代に亘るアメリカン・ボード宣教師。アーモスト大学に入学し、在学中に新島襄と知り合う。同校を1872年に卒業し、その後アンドーヴァー神学校を卒業。1878年妻と来日。1892年より同志社神学校教授をしていた。妻の Ellen Maria Cary (1856-1946) も同志社女学校で英語と英文学を教えた (ケリー一家については『アスフォデル』56号、p.209の註10、及び p.229の註11を参照のこと)。
5. 原文では Committee ad Interim
6. 原文では Prudential Committee
7. 「京都府知事公舎」は中立売御門前に1920 (大正9年) に完成した。だが戦後は公舎としての使用頻度が減少し、その跡地に1988年 (昭和63年) 「京都府立府民ホール・アルティ」と「京都府公館庭園」が建設された。
8. Speer, Robert Elliot (1867-1947) ペンシルベニア出身。プリンストン大学卒業。

アメリカ長老派教会の指導者。1891年米国の長老派ミッションの幹事となり、日本も含めて世界各国にあるミッションを訪問。彼の下、長老派教会の海外伝道事業は著しく成功した。著作、論文、記事は多数。1937年引退。

9. 日野真澄 (1874-1943) 山形県出身。仙台の東華学校を経て1897年同志社神学校を卒業後、米国に留学。ユニオン神学校、コロンビア大学で教会史、哲学史などを学びBD および MA の学位を取得。帰国後、同志社神学校教授に就任。だが1918年学内の紛争により同志社を去る。更に1919年1月25日に自宅が全焼して子供たち5人が焼死。蔵書も全て失い生活費も失った。1920年神戸高等商業学校教授に就任。1930年には同志社に復職、その後、1937年に文学部教授となり41年に引退した。
10. 牧野虎次 前出〈BE-12〉註13参照。
11. 広岡夫人とは広岡浅子 (1849-1919) のこと。明治を代表する女性実業家。広岡家や実家の三井家一門に働きかけ、三井家から目白台の土地を寄付させ、1901年の日本女子大学校（現日本女子大学）設立に導いた。その後も女子教育に対する情熱は衰えることがなく、1914年から亡くなる1年前の1918年まで毎夏、御殿場で若い女性を集めた合宿勉強会を主宰。参加者には若き日の市川房枝や村岡花子らがいた。娘とは長女の広岡亀子 (1876-1973) のこと。夫は広岡恵三（加島銀行頭取、大同生命2代目社長、大阪電気軌道初代社長）。
12. 学校は結局設立には至らなかったようだが、詳細不明。
13. 芦田慶治 (1867-1936) 兵庫県丹波市生まれ。関西学院神学部卒業後、1898年渡米。ヴァンダービルト大学とイエール大学で学ぶ。1902年帰国後、関西学院神学部で教鞭を執るが1909年同志社神学校に移る。大学令により同志社大学が設立された1920年に文学部長並びに神学科主任となり、1923年には大塚節治らと学術雑誌『基督教研究』を創刊。1932年引退。
14. 原文ではデントンは“Tominomori (?)”と書いているが、富森京次 (1887-1954) のこと。京都市生まれ。膳所中学から同志社神学校入学、1912年卒業。1914年同志社神学部講師に就任後、留学のため渡米。1919年イエール大学で、また1921年にはシカゴ大学でそれぞれ学位を得て帰国。神学部教授となる。神学科主任、文学部長。母は同志社女学校舎監を25年間勤めた富森幽香。
15. パートン博士 前出〈B-32〉註5参照。
16. Bell 夫人のこと。Anna Elizabeth B. Bell。ベル夫妻は1902年来日、1904-5年、京都でデントンと共に働く。夫人の体調不良で1905年帰国。

〈ベル書簡 BE-13〉【柿本真代 訳】

1919年7月25日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

5月26日、6月17日付のそちらからの2通のお手紙¹を受け取り、かなり衝撃を受けました。しかし私にはとても納得できるものでしたので、非常によく立ち向かえました。実際にこのような衝撃なら今後何度受けても構わないでしょう。

同志社の事態について見解を書いてくださり大変感謝しています²。デントンさんが原田博士³についてのご意見をお伝えくださり嬉しく思っています。ご存じのように、原田氏は今ここ〔ボストン〕におられて、日本よりアメリカの方が友人が多いと思うと昨日言っておられました。楽しく過ごしておられるようで、彼の心の中が分かり、あえて言葉にするなら、「私の知ったことではない」と言ったところでしょう。原田博士はいつものように同志社のことに熱心で、同志社に必要なものについて絶えず話しておられますが、以前ここに來られたときのように、もう総長としての重責を負う必要はないのです。京都で彼の顔にみられた心配な皺はかなり消えています。つまり、原田氏は、〔ここアメリカでの滞在を〕大いに楽しんでいるのです。

ケリー氏⁴の敷地の南側売却に反対するデントンさんからの手紙は、運営委員会で効果を発揮するには到着が遅すぎました。私どもは常に正しいことをしたいと思っていますし、この件では確かに土地の資産価値を下げていないことを願っています。手紙を寄こしてきた人たちの圧倒的な判断では、長い目でみればこの土地の資産価値はむしろ上がるだろう、というものでした。私どもは知事にも喜んでもらえてよかったです。

ミッション議事録の第48回決議に関して、デントンさんが、教師としてバートンさん⁵の採用を要請すると太平洋ウーマンズ・ボードへ書かれたことは、太平洋ボードにも直接届いたかと思います。ですが、念のために私からもこ

の件は伝えておきますので。

昨晚はポーリーン⁶とフロレラ⁷と一緒に「具鍋」⁸を食べました。皆満腹になり「日本」のことを夢見ました⁹。フロレラはポーリーンと同じぐらい日本語が上手です。このような「日本の」雰囲気に戻るのもよいものでした。ところでポーリーンはドーデーさん¹⁰が種をまかれた「日本伝道の」仕事を引き継ぐため、ウーマンズ・ボードの宣教師として行くことを望んでいます。ウーマンズ・ボードとしてはこの問題を真剣に検討しています。ポーリーンがその仕事にどれだけの時間を割くことができるか、また彼女自身の宗教的な目的はどうかによって多くのことが決まります。ウーマンズ・ボードではすべての任命に慎重を期しており、もちろん徹底的に調べるつもりです。ポーリーンと話せば話すほど、彼女には南「九州」の人々より北海道の日本人に対する使命感があるのかもしれない、と感じるようになりました¹¹。

以上ここまでを書きとらせている間、原田博士が来てくださり、私の言ったことにOKを出してくださいました。

コンスタンチノーブルからちょうど今しがた7月20日付で次のような電報が届きました。「パートン¹²は元気だ。今サロニカ¹³にいる。帰国前にコーカサス¹⁴を訪問希望」と。

彼は赤痢で数週間入院していましたが、どうやら元通り元気になっているようです。

敬具

イーノック F. ベル

1. 2通の手紙の内、5月26日付はこのすぐ前の書簡[D-58]だが6月17日付の書簡は見つかっていない。内容についても不明。
2. 同志社紛擾のこと。前出〈B-32〉註3参照のこと。
3. 原田助 前出〈B-32〉註2参照。
4. ケリー氏 前出〈D-58〉註4参照。
5. Burton, Mary Elizabeth (1870- ?) イギリス、ロンドン出身。1916年1月来日。

- 1916年1月から17年7月まで滞在。京都ではデントン・ハウスに住んだ。そして1918年8月、再来日して翌1919年までいた。専門学部講師として英文学を教えた。
6. 前出〈BE-12〉註6の続き。ポーリーンは1919年12月再来日して札幌に着任。1922年4月に北海道帝国大学予科の英語教師 Harold M. Lane と再婚。札幌の北海道大学で教鞭をとる。1941年軍機保護法違反の嫌疑をかけられ夫とともに逮捕・服役し、アメリカへ送還される。戦後は北大有志の再招聘運動に応じ、1951年に夫婦は再来日し、夫のハロルドは北大教養部で、ポーリーンは北海道教育大学で教鞭をとった。1966年に札幌で没。
7. Pedley, Florella Foster (1898-1937) 1889年に来日して新潟や前橋、京都など40年にわたって伝道に従事した Hilton Pedley (1862-1930) の長女。1920年マウントホリヨーク・カレッジを卒業。1922年に来日、1925年まで神戸女学院に勤めて8月に帰国。1925年12月 Conrad Van Hyning と結婚するが1937年フロリダでの自動車事故で死亡。
8. 「具鍋」は日本の鍋料理か。
9. ポーリーンの父親は宣教師の George Rowland で彼女は京都生まれ。日本語が堪能だった。同じくフロレラも父親は新潟などにいた宣教師 Hilton Pedley で、彼女も日本語が堪能だった。ベルも京都に短期間だが滞在したので、3人で鍋料理を食べると、「日本」を思い出して懐かしかったのだろう。
10. Daughaday, Adelaide (1845-1919) ニューヨーク州出身。オールバニー師範学校 (Albany Normal School) とメープルウッド神学校で学ぶ。1883年に来日、大阪や鳥取、札幌で教育・伝道に従事した。特に禁酒運動に励んだ。1919年7月1日札幌で没。
11. この書簡が書かれたのは1919年7月25日。札幌でドーデーが亡くなったのはその直前7月1日である。このため当時未亡人であったポーリーンはドーデーの遺志を継いで北海道での伝道活動を希望する。そしてこの年19年12月末に札幌に着任した。
12. パートン 前出〈B-32〉註5参照。
13. サロニカはテッサロニキのこと。ギリシャ、エゲ海の港湾都市。
14. コーカサスは黒海とカスピ海に挟まれた地域でジョージア、アゼルバイジャン、アルメニアを指す。

〔謝辞〕 註作成に当たって、数名の人物の不明な没年を八木谷涼子氏からご教示いただきました。また、代表団と牧野虎次が同じ船であったことも八木谷氏の調査から判明いたしました。厚く御礼申し上げます。

【追記】

「M. F. デントン書簡の翻訳を終えて」

坂本 清音

『アスフォデル』誌上で掲載を許された「アメリカン・ボード宣教師文書—同志社女学校女性宣教師を中心として—」シリーズ2人目の〈M. F. デントン書簡一訳及び註一〉が、この号で終わりを迎える。

1人目に取り上げた女学校最初の女性宣教師「校長」¹A. J. スタークウェザーの場合は、在任期間が7年間（1876-83）であったのに対し、M. F. デントンは来日以来60年間（1888-1947）日本に滞在し、日本で生涯を終えた。したがって取り上げる書簡（デントン⇔アメリカン・ボード関係者）数も、膨大なものになるはずだ。しかしながら、利用できるマイクロフィルム²の個人書簡は1919年までなので、実際は彼女の来日以降、約30年分ということになる。それでも、スタークウェザー書簡、『アスフォデル』45～49号（2010～2014）掲載の38通に対し、デントン書簡は49～58号（2014～2023）131通に及んだ。ただし、そのうちデントン発は55通である。

内容的には両者とも同志社女学校および生徒たちの状況を知らせることが第一であったが、来日の時期によって受け入れ側の環境に差があったため、書簡の内容が大きく異なる。スタークウェザーの場合は、京都が基督教に門戸を開いてまだ日が浅かったので、彼女の異文化葛藤を巡る記述、女学校の存廃が問題となる記事も書かれている。一方、デントンの場合は、鹿鳴館時代を過ぎての来日で、西洋文明に対する許容度も徐々に進んでいたこと、かつ同志社女学校も創立12年を迎えて基督教女子教育も軌道に乗っていたこともあり、彼女の訴えはもっぱら女学校の成長・発展に関するものだった。特にデントンの場合、ゴードンとの出会いにより出国前から日本で新島襄の学校の手助けをしたいとの明確な使命があった上に、「同志社女子部は

世界で一番いい学校」という自身の思い入れとも相まって、書簡の多くは同志社女学校に対する人的・経済的援助を熱烈に訴える内容になっていく。ただし到着前後の書簡には、日本語学習の難しさ、音楽の素養のないこと、高等教育を受けていないことによる学歴コンプレックス等々、自信のなさが繰り返し吐露されている。

しかし時代が進むにつれて、デントンの強烈な個性は存分に発揮されてあちこちらでぶつかり合いながらも、彼女の一途な誠実さ、いつも相手（同僚の宣教師を含めて）に感謝し相手を褒める態度は、書簡を受け取るボード本部の幹事を喜ばせ、彼女の書簡を待ちわびる様子が伝わってくる。その上に出国前から宣言していた「自分にあるのは熱意だけ」³という態度は生涯貫かれていて読者を納得させる。

第49号の「はじめに」に書いた通り、デントンには没後6年に出版された追悼集を始め、3冊の伝記があり、太平洋戦争中のドキュメンタリーもある。それ故、生涯のあらましや彼女ならではの異色のエピソードは（間違いを含めて）、かなり広く知れ渡っている。

一方、『アスフォデル』に掲載中の書簡は、デントンがリアルタイムで本国の支援者や団体に送った書簡（報告書）と相手方からの返信であり、それを一字一句正確に復元し、第一次資料として後続の研究者に資することを目的としている。具体的には、同志社大学図書館所蔵の宣教師文書のマイクロフィルムからデントン書簡を選び出して複写し、独特の、大変読みにくい手書き原稿を先達の手解きを受け *native speaker* の助けを借りて活字化する作業から始まる。その後は毎月1回の勉強会で訳に取り組み、書簡に出てくる事象を同時代に出版された『同志社百年史』や『同志社女学校期報』を参照して跡付け、登場する人名には注をつけることにより、デントンの人脈や女学校教育の実態を明らかにする、という一連の作業である。

生存中の新島襄は、男学校を大学にする運動や日本各地の伝道活動に忙し

く、女学校の教育に直接関わることは事実上無理だった（少なかった）。その期間に女学校に住み込んでキリスト教女子教育に専念した女性宣教師たち⁴や、その後を受けて60年間の生涯を女子教育の向上に献身したデントンの働きは宣教師文書を読み解くことによって初めて理解される。要するに宣教師文書は彼女たちが同志社女学校に「キリスト教主義、国際主義、リベラルアーツ教育」の種を撒くことだったことを検証する資料となる。今後ともに宣教師文書の活用が期待される所以である。

1. 宣教師文書の中では、「京都ホーム」以来の同志社女学校の教育及び経営の責任者は女性宣教師（代表1人）と位置付けられ、“principal”または“head”と記述されている。しかし日本側の正式文書では、新島襄が校長なので、括弧付きで表記している。
2. 利用したのは、同志社大学所蔵のマイクロフィルム（Papers of the ABCFM, by Research Publications, Inc.）である。
3. M. F. Denton to M. L. Gordon 1887. 5.31
4. 創設以来17年の女子教育の責任を担った5人の「校長」および在任期間は以下の通り。
A. J. スタークウェザー（1876-83）、A. Y. デイヴィス（1883-85）、V. A. クラークソン（1885-87）、F. ホワイト（1888-91）、M. H. マイヤー（1891-93）

以下に、デントン関連の書物と参考資料（研究論文）の主たるものを挙げておく。

〈追悼集〉

同志社同窓会編『ミス・デントン』1953年

〈伝記〉

F. B. Clapp, *Mary Florence Denton and the Doshisha* 同志社女子大学
1955年

(翻訳『ミス・デントン―「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年―』同志社女子大学・同志社同窓会 2007年)

中村貢『デントン先生』同志社女子大学 1975年

銅銀松雄『デントン先生と一警察官』刊行推進会 1975年

小野恵美子『日米の懸け橋―日本の女子教育に捧げたデントンの生涯―』大阪書籍 1988年

〈書簡翻訳〉

宣教師文書研究会編「アメリカン・ボード宣教師文書―同志社女学校女性宣教師を中心として―〈M. F. デントン書簡―訳および註―〉(1)―(15)」(2014～2023) 同志社女子大学英語英文学会『アスフォデル』vol.49-58.

参考文献他

〈資料紹介〉(年代順)

坂本清音「Miss Denton's Diary (1943. 8. 12～9. 23)」『同志社談叢』17 (1997) : 1-35.

——「同窓会に対するデントン遺言書―昭和14年1月25日」『同志社談叢』17 (1997) : 267-281.

日比恵美子「Miss Denton's Diary (1935, 1936, 1937, 1943)」『同志社談叢』20 (2000) : 122-167.

——「ミス・デントンから荒木和一への書簡」『同志社談叢』23 (2003) : 57-97.

坂本清音「同志社栄光館ファウラー・チャペルのファウラー氏をめぐって」『同志社談叢』24 (2004) : 155-171.

——「M. F. デントンに関する新資料―遺言・死後叙勲・生年について」『同志社談叢』29 (2009) : 105-132.

——「占領軍 G. I. O. W. フロストが語るミス・デントン 1945-46」

『同志社談叢』37 (2017) : 1-30.

—— 「女性宣教師園長を中心とした出町・今出川幼稚園史—デントン・ラー
ネット・ファニング・パートレット園長時代—」『同志社談叢』40 (2020) :
117-129.

〈論叢〉(年代順)

日比恵美子「ミス・デントン来日の前後 (1)」『同志社談叢』25 (2005) :
97-117.

—— 「ミス・デントン来日の前後 (2)」『同志社談叢』26 (2006) : 99-
119.

—— 「ミス・デントン来日の前後 (3)」『同志社談叢』27 (2007) : 95-
114.

—— 「ミス・デントン来日の前後 (4)—J. N. ハリス宛の1通の手紙を巡っ
て—」『同志社談叢』29 (2009) : 133-150.

坂本清音「ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるま
で—来日後10年余の紆余曲折を経て—」『同志社談叢』36 (2016) : 31-67.

坂本清音・八木谷涼子「M. F. デントンの第1回賜暇休暇 (サバティカル)
1900/3-1901/9—その目的と成果を検証する—」『同志社談叢』43 (2023) :
1-30.

〈その他〉

坂本清音『The Roots』、『VINE』、『清風』、『同志社同窓会報』にデントン
関連記事を随時掲載